

子供たちの原風景

瓜生 隆宏

夏休みが始まった。私と同世代の多くの方々と同じで、私の子供時代の原風景は野山での遊びにあったように思う。今から思えば、子供らが自然の中で遊べる、いい時代だったのかも知れない。今日もあの日と同じように蝉が鳴いている。

そんな夏の日の昼下がりに、ごろごろしていると、目に止まったのが、中学生になった私の子供が飽きて、もう使わなくなった「ゲームボーイ」である。これには「ポケットモンスター」というゲームソフトが差し込んである。若い方や子供をお持ちの方はご存知だと思うが、ゲームボーイとは、かの任天堂が1989年に発売し大ヒットした携帯ゲーム機の元祖である。そのソフトのひとつがポケットモンスターで、1996年にゲームフリークという会社が発売し、これまた大ヒットして今なお売れ続けているロングセラーである。私も発売当時、子供にせがまれて、赤バージョン、緑バージョンとい

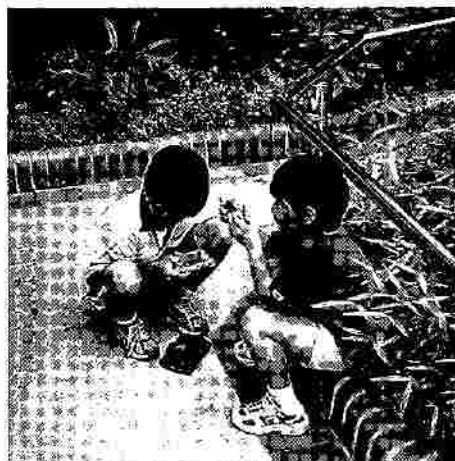
ったソフトを予約して買った記憶がある。そんなポケットモンスター(略してポケモン)であるが、暇にまかせてやってみると、なかなかよくできたソフトである。ゲームをする自分が主人公になって、自分の住んでいるマサラタウンから「ポケモン図鑑」を完成させるため、ポケモンを捕まえる冒険の旅に出る。その途中でいろいろな人に出会い、いろいろなポケモンと戦って本場に多くの疑似体験をする。

まず、登場人物で面白いと思ったのは、「虫取り少年」や「ボーイスカウト・ガールスカウト」といった子供たち。これは私が少年時代、虫取りに情を出し、中にはボーイスカウトの活動で賢いことを教えてもらって感心したことを思い出させる。次に登場するのが、大人たちである。「釣り人」とか「ミニスカート」とか「大人のおねえさん」といった人たち、「化学者」や「電気系の男」といった、

ちよつとオタクな理科系の人たち、「ロケット団」といった悪い人たち。当然、友人でありライバルでもある「マサキ」や、ポケモンを集めるにあたっての先生といふべき「オーキド博士」や多くの「ポケモントレーナー」まで用意されている。他にも上げればきりがなが、とにかくこれらの登場人物は、私たちが大人になる過程で出会った人々そのままのような気がする。次に、冒険の舞台であるが、いくつかの町が用意されていて、そこを次々と旅して訪れる。



「ゲームボーイ」と「ポケットモンスター」のカセット(ソフトウェア) 右上にあるのはポケモンの中の人気者「ピカチュウ」の人形



今の子ども達は屋外でも
携帯ゲーム機で遊んでいる

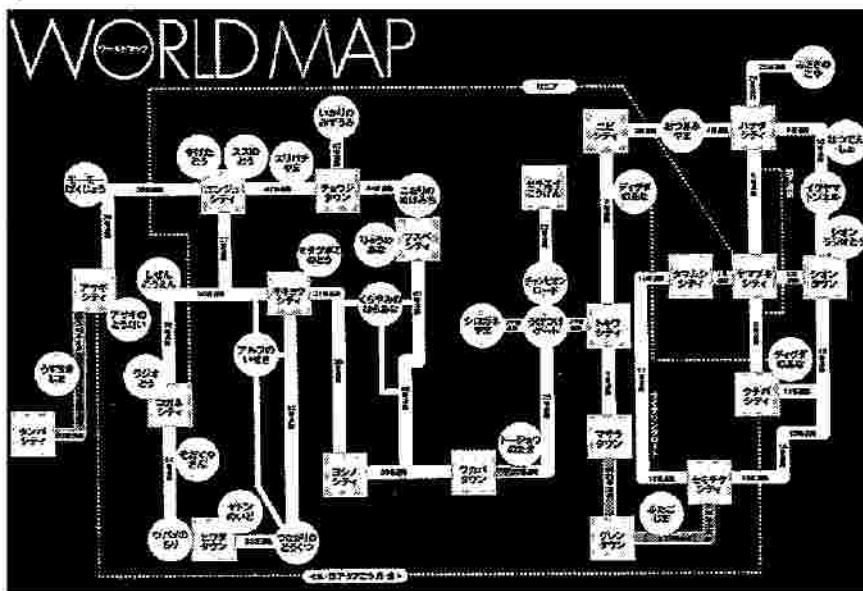
途中、林あり、洞窟あり、岩山あり、海ありで
そこで多くのポケモンや人々に出会う。そして、
町に来るといろんな物を売っている店があり、
旅の途中で稼いだ金で物が買える。旅の途中で
はいろんな人から情報を得たり、ものを拾った
りもする。まさしく、私たちが旅で体験するこ
とそのものである。

これだけではない。これから新しい時代を生
きる子供たちに、必要な技術も盛り込まれてい
る。それは、コンピュータ通信である。ゲーム
の中ではポケモンセンターというところにネッ
ト端末が設置されていて、コンピュータ通信で
ポケモンを転送したり、他の人と会話できたり
する。また、通信ケーブルというオプションを
買えば、友達のパケットボーイと集めたポケモ

ンを交換できる仕組みも用意され
ている。これは、遊びながらイン
ターネット社会の基礎を学ぶよう
になっているのではないか。コン
ピュータゲームは子供たちを孤立
させるとか、言われることもある
が、このポケモンを交換できる
という仕掛けは、ポケモンの交換を
通して友達との会話ができるよう
である。

何か、ポケモンのPRのように
なってしまったが、私たちが子供
のころやった、虫とり遊びに似た
感覚を思い出させるものである。
まあ、子供は自然の中で遊ぶべき
だといった意見もあるう。だが、
自然の中の遊びも知って、コンピ
ュータゲームを体験した子供たち
が大人になったとき、それを自分
たちの少年少女時代の原風景とし
ても悪くはないのではないかと思
った夏の昼下がりである。

兵庫県淡路郡民局
洲本土地区改良事務所



「ポケットモンスター」中の仮想世界地図
右下のほうに出発地点のマサラタウンが見える
(「ポケモンずかん 任天堂公式ガイドブック」小学館発行より引用)